

夏目漱石の『吾輩は猫である』について話す機会があり、その人生をまとめていたら、こんなに波瀾万丈だったのかと驚いた。

神経衰弱だったことは知っていたけれど、それが単に当時は病名がなかっただけで、いまだったらちゃんとした治療が必要なことは間違いないだろう。そして、そうなるに至る事情があまりにあり過ぎて、よく小説を書くに至ったものだとか奇跡のようなものを感じた。

夏目漱石の本名は夏目金之助。

江戸の牛込馬場下(現在の早稲田駅近く)にて、1867 年、地主の末っ子(五男)として生まれた。父親は江戸の牛込から高田馬場までを治め、公務を取り扱い、民事訴訟を自宅で裁くなど権力を誇っていたという。

だが、明治維新(1868-1889 年)が盛り上がるにつれて、夏目家も没落しつつあり、漱石は生後すぐ、里子に出されてしまう。不憫に思った姉がすぐに連れ戻したらしいけど、その後も状況は良ならず、1868 年、1 歳で父親の書生だった男の家(塩原)の養子となったとか。でも、そんな養父は女癖が悪く、家庭崩壊。1875 年、7 歳の漱石は実家に戻った。そのため、幼心に実の親が誰なのか分からなかったという。

1876 年、漱石が 9 歳のとき、養父母は離婚。これで正式に漱石は実の親の子どもに戻るはずが養父がそれに抵抗し、実の父親 VS 養父の争いが始まる。結果、漱石が夏目家に復帰するのは 1888 年、21 歳の時だったというから泥沼化が想像される。

なお、この養父はなかなかのクズっぷりを発揮し、漱石が有名になってから、金の無心に現れたようで、晩年の自伝的小説『道草』(1915 年)ではそのことがモチーフに描かれている。現実と時系列をずらし、養父による金の無心については『吾輩は猫である』を書いていた頃としているが、描写はやたらリアリティがある。

ちなみに『道草』は表向きは社会的に成功しているけれど、妻からは認められず、養父には悩まされ、妻の父親が投資に失敗したと聞かされ戸惑い、体調は悪く、新たな子どもの誕生に経済的不安を覚えるという漱石の苦悩がひたすら

書かれている作品で、100 年以上経った現在でも共感できる。特に、養父に手切金を払うラストシーンで、

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起った事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなるだけの事さ」

と、人生は常に悩みの連続であることを示すセリフをわたしは嫌なことがあるたび、思い出してきた。

1874 年、7 歳の漱石は養父のもとで浅草の小学校に入学するも、市ヶ谷や神田の学校へ転校を繰り返す。これは当時の学制に基づくステップアップを目的としたもので、1879 年、12 歳で一ツ橋にあった東京府第一中学(現在の日比谷高校)正則科に入学する。

ただし、正則科では大学予備門受験(現在の大学受験)教育がなく、文学好きだった漱石は英語・漢学・文学を身につけるため、中学を辞めて、漢学私塾二松學舎(現在の二松學舎大学)に通ったらしい。

その頃、漱石は実母を亡くし、そのショックから、本人の中で文学を志す気持ちが育まれたという分析がされているみたい。しかし、漱石の長兄は優秀だった漱石に夏目家復興を期待、文学よりも大卒の立身出世を目指せとうるさく、二松學舎を中退。

ちなみにこの長兄は樋口一葉とお見合いをする予定だったとか。もしかしたら、千円札と五千円札の人が親戚になっていたかもという歴史の IF にはワクワクしてしまう。

その後、1883 年に 16 歳で神田の英語塾に入学。1884 年、17 歳で大学予備門に入学。試験本番で隣席の友だちが答えを教えてくれてラッキーだったみたいだけど、その友だちは落ちてしまったというから、いやはや世知辛いにもほどがある。

1886 年、19 歳のとき、大学予備門は第一高等中学校に改称。いわゆるナンバースクール (旧制高等学校)の始まりである。

全国に第一から第八までの高等中学校が設置され、戦後、1950年の学制移行の際にそれぞれが新制大学となった。なお、漱石の通った第一高等中学校(一高)が後の東京大学となる。

漱石はそんな第一高等中学校で様々な友人と出会う。有名な同級生は正岡子規や南方熊楠だけど、今回、いろいろ調べる中で哲学科の友人・米山保三郎が重要な役割を果たしていたと初めて知った。エッセイ『落第』(1906年)によるともともと漱石は兄の影響で文学を諦め、建築科を希望していたが、米山保三郎の説得で文学を目指し直すことにしたそうだ。

僕は其頃ピラミッドでも建てる様な心算で居たのであるが、米山は中々盛んなことを云うて、君は建築をやると云うが、今の日本の有様では君の思つて居る様な美術的の建築をして後代に遺すなど云ふことはとても不可能な話だ、それよりも文学をやれ、文学ならば勉強次第で幾百年幾千年の後に伝える可き大作も出来るじゃないか。と米山はこう云うのである。〈省略〉こう云われて見ると成程そうだと思うるので、又決心を為直して、僕は文学をやることに定めたのであるが、国文や漢文なら別に研究する必要もない様な気がしたから、其処で英文学を専攻することにした。

夏目漱石『落第』より

夏目漱石 落第 www.aozora.gr.jp

とはいえ、やっぱり漱石の人生を変えたのは正岡子規との出会いだろう。

1889年、22歳のとき、漱石は正岡子規と仲良くなる。子規はとても文化的にアグレッシブな人物で、自作の漢詩や俳句を同人誌にまとめて、学校の友だちに読んでもらっていたという。そんな子規に興味を持った漱石は子規の作品解説を行う。その際、実名掲載に躊躇し、ペンネームをたくさん持っていた子規にひとつ譲ってもらう。このペンネームこそ「漱石」だった。

「漱石」の名は唐代の『晋書(シンジョ)』にある故事、「漱石枕流(ソウセキチンリュウ)」に由来し、石で口をすすぎ、川の流れを枕にして眠るような変わり者で自分の失敗を認めない頑固者を意味している。

ちなみに漱石は真面目な学生で、子規は不真面目な学生だったとか。後に漱石が英語教師として赴任する熊本の五高の生徒で、漱石門下となり、「天災は忘れた頃にやってくる」の警句で知られる学者・寺田寅彦が当時の噂を記録している。

熊本の近況から漱石師のうわさになつて昔話も出た。師は学生の頃は至つて寡言な温順な人で学校なども至つて欠席が少なかったが子規は俳句分類にとりかゝつてから欠席ばかりして居たさうだ。師と子規と親密になつたのは知り合つてから四年もたつて後であつたが懇意になると随分子供らしく議論なんかして時々喧嘩などもする

寺田寅彦『根岸庵を訪う記』より

[寺田寅彦 根岸庵を訪う記 www.aozora.gr.jp](http://www.aozora.gr.jp)

友人に恵まれた一高時代、漱石に立身出世のプレッシャーをかけてきた長兄が死去。その三ヶ月後に次兄も亡くなる中、1890 年、23 歳で漱石は帝国大学の英文科に入学。

なお、この頃の英文科は 3 年前に創設されたばかりで人気もなく、同期はゼロ、先輩も二学年上に一人いるだけだったらしい。寂しい。

1891 年、24 歳のとき、慕っていた三兄の妻が亡くなる。評論家の江藤淳は漱石がこの三兄の妻に恋心を抱いていたと分析し、その根拠に亡き兄嫁に向けた句を挙げている。例えば、こんな感じ。

君逝きて浮世に花はなかりけり
朝貌や咲いたばかりの命哉
今日よりは誰に見立てん秋の月

ここまでは美しい。

骸骨やこれも美人のなれの果て

これはちょっと病んでいるかも。とにかく、こういう句を漱石は短期間に何十首も詠んだという。

身近な人たちが次から次へと亡くなり、漱石は神経衰弱に悩み始める。誰かに監視されたり、他人からバカにされたりしていると感じ、被害妄想に苦しんだようで現代の診断基準だとたぶん病名がつくような症状に苦しんだらしい。

1892 年、25 歳のとき、兵役逃れのため北海道に転籍し、学費を稼ぐため、東京専門学校（現在の早稲田大学）の講師になった。

この年、漱石は夏休みを利用して、仲良しの子規と一緒に松山は子規の実家を訪ねる。そこで子規の地元の子分だった 15 歳の高浜虚子と出会うのだが、『吾輩は猫である』を考える上でこの出会いは欠かせない。

漱石は帝国大学を卒業後、文学部長の推薦で高等師範学校（先生を養成する学校）の教師になるもうまく授業ができなかったり、恋愛問題で悩んだり、神経衰弱を再発し、東京にいるのが嫌になった結果、1895 年、28 歳で逃げるように松山の中学校（現在の高校）教師となった。

1896 年、29 歳で熊本の高校（現在の熊本大学）へ赴任。同年、親族の勧めで貴族院書記官長の娘・鏡子と結婚するも、鏡子は 3 年後には慣れない熊本生活と流産のため精神的におかしくなり、自殺未遂を図るなど夫婦生活は完全に行き詰まってしまう。

そんなタイミングで 1900 年、33 歳だった漱石は文部省から、英語教育法研究のためイギリス留学を命じられ、渡英。最初はロンドン大学の授業を受けるも馴染めず、聴講をやめて、シェイクスピア研究科の個人授業を受け始めるが、英文学を学ぶことに苦痛を感じ、神経衰弱を再び発症、「夜下宿ノ三階ニテツクヅク日本ノ前途ヲ考フ……」と引きこもったみたい。

他の留学生との交流は絶え、文部省に白紙の報告書を送り、下宿屋の女将さんからも心配されるほどふさぎ込み、1902 年、文部省内で「夏目発狂」の噂が流れ、ついには帰国命令が出てしまう。

1903 年、36 歳の漱石はイギリス留学から神経衰弱を極めて帰国。東京帝国大学(1897 年に名称変更)で小泉八雲の後任講師となるも、小泉八雲と比べて話がつまらないと学級崩壊。自信を喪失。

さらに一高の講師も務めていたが、態度の悪い生徒を叱った数日後、その生徒が華嚴の滝で入水自殺、世間の声や自責に悩む。なお、この生徒の名前は藤村操である。

しかも、前年、親友の正岡子規が亡くなってしまった。

絶望に絶望が重なった漱石を励ますように、高浜虚子が気を紛らすために小説の執筆を依頼する。その頃、虚子は子規にちなんだ雑誌「ホトギス」を引き継ぎ、総合雑誌として拡大させるべく頑張っていた。

そんなわけで、漱石が虚子に頼まれ、1905 年に出来上がった小説こそ『吾輩は猫である』(1905 年)だった。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

夏目漱石『吾輩は猫である』より

[夏目漱石 吾輩は猫である www.aozora.gr.jp](http://www.aozora.gr.jp)

日本で一番有名な小説なので、ほとんどの人はこの書き出しは知っているはず。でも、『吾輩は猫である』がどんな小説かと聞かれたら、みんな、困るんじゃないだろうか？

一応、あらすじは以下の通り。

主人公は名前のない猫。英語教師の苦沙弥(くしゃみ)先生の家で飼われている。猫は自由気ままに行動し、主人とその家族の生活を観察したり、風変わりなお客さんとの会話を盗み聞きしたり、近所の人たちの悪巧みを探偵したりする。人間はなんておかしい生き物なのだろうと不思議がりつつ、見ていて飽きないと面白がっていく。そ

して、人間の真似をしてお酒を飲んでみたところ、思った以上に酔っ払い、水がめに落っこちて溺れ死んでしまう。

実は名前のない猫、最後、溺れ死んでしまうのだ。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起った。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従ってようやく楽になって、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなった。〈省略〉我に帰ったときは水の上に浮いている。〈省略〉吾輩は大きな甕の中に落ちている。〈省略〉

その時苦しいながら、こう考えた。こんな呵責に逢うのはつまり甕から上へあがりた**い**ばかりの願である。あがりた**い**のは山々であるが上がれないのは知れ切っている。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面にからだが浮いて、浮いた所から思う存分前足をのばしたって五寸にあまる甕の縁に爪のかかりようがない。甕のふちに爪のかかりようがなければいくらも掻いても、あせっても、百年の間身を粉にしても出られ**こ**ない。出られないと分り切っているものを出ようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹っているのは馬鹿氣ている。

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご免蒙るよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になってくる。苦しいのだからありがたいのだから見当がつかない。水の中にいるのだから、座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても差支えはない。ただ楽である。否、楽そのものすらも感じ得ない。日月を切り落し、天地を粉塵（ふんせい）して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。

夏目漱石『吾輩は猫である』より

むかし、読んだときは雑な終わらせ方だなあと大して気にも止めなかったのだけど、今回、夏目漱石と藤村操の縁を知ったことで、この終わり方に意味があるんじゃないかと考えずにはいられなかった。

実際、作中、藤村操の自殺を想起させる場面もあった。

苦沙弥先生が担任している生徒・古井武右衛門が、苦沙弥の隣人である実業家・金田の娘にラブレターを送り、それが発覚して退学処分となってしまう。しかし、古井武右衛門によると友人に名前を貸しただけで、自分がラブレターを送ったわけではなく、苦沙弥に助けを求めにきた。苦沙弥は面倒くさがり、断りつつも、最後は担任として生徒の味方になり、校長に直談判するも、結果的に職場の居心地は悪くなってしまう。

そのシーンで古井武右衛門を茶化しつつも、藤村操の事件が言及されている。

この様子ではいつまで嘆願をしても、とうてい見込がないと思い切った武右衛門君は突然かの偉大なる頭蓋骨を畳の上に押しつけて、無言の裡に暗に訣別の意を表した。主人は「帰るか」と云った。武右衛門君は悄然として薩摩下駄を引きずって門を出た。可愛想に。打ちやって置くと巖頭(がんとう)の吟(ぎん)でも書いて華厳滝から飛び込むかも知れない。元をただせば金田令嬢のハイカラと生意気から起った事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になって令嬢を取り殺してやるがいい。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなったって、男子はすこしも困らない。

夏目漱石『吾輩は猫である』より

「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔し風だから、何でもむずかしく解釈なさるんです」
苦沙味「しかし愚じゃないか、知りもしないところへ、いたずらに艶書(エンショ)を送るなんて、まるで常識をかいてるじゃないか」
友人・寒月「いたずらは、たいがい常識をかいていまさあ。救っておやんなさい。功德になりますよ。あの容子じゃ華厳の滝へ出掛けますよ」

夏目漱石『吾輩は猫である』より

ちなみに巖頭の吟とは藤村操が華厳の滝に飛び込んだとき、巖頭の板に彫った遺書のこと。

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀(ショウク)を以て此大をはからむとす。ホレーショの哲學竟に何等のオーソリティーを價(アタイ)するものぞ。萬有の眞相は唯だ一言にして悉(コトゴトク)す、曰く、不可解。我この恨を懷いて煩悶、終に死を

決するに至る。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。

※ホレーショはハムレットの登場人物説やローマの詩人ホラティウス説など諸説あり。

藤村操『巖頭の感』より

藤村操 巖頭の感 www.aozora.gr.jp

なんとなく、巖頭の吟と水に溺れた猫が死を受け入れるまでの言葉が似ている気がした。

なお、藤村操の自殺が意味したものについて、当時の知識人に与えた影響の大きさが一般に言われている。問いのも、それまで日本における自殺は経済的自殺か病気の痛み解放されるための自殺だったのに、藤村操は若いエリート学生であり、客観的には順風満帆な未来が待っていた。しかし、自分が何のために生きているかわからないと悩みを記し、哲学的な自殺を遂げたことは衝撃だった。「立身出世」を目指すことが当たり前な時代に、そうじゃない価値観の提示に触発されて、後追い自殺が増加。警戒中の警察官に保護され、多くが未遂に終わるも藤村の死後、華嚴の滝は自殺の名所となった。

本当のところ、藤村操がなぜ自殺したのかはわからないけれど、明治の若者が「自分の生きる意味」を考え始めるきっかけのひとつだったと一般的に言われている。

こんな風に当時の若者たちの葛藤を捉えていくと、すでに先生と呼ばれる年齢と立場になっていたギリギリ江戸時代生まれの夏目漱石の立ち位置が見えてくる気がする。『吾輩は猫である』をセラピー的に書いていたとするなら、自らを間抜けな苦沙弥先生に設定し、それを名前のない猫の目を通して描いた理由もつかめるんじゃないかな。

なにせ、名前は江戸から明治に世の中が変化したことを象徴する要素のひとつ。そもそもは政府による国民管理が目的だったんだろうけど、1870年(明治3年)『自今平民苗氏被差許候事』の布告で平民も氏名を使うようになったことで、人々は「自分」という存在を意識し始めたに違いない。それは翻ってエリートだった学生たちの特権性を揺らがせることにつながったはずで、「近代的自我の目覚め」という幻想によって

若者たちは自らのアイデンティティに迷うという意味で「名前はまだない」状態に陥ったはず。

だとすれば、『吾輩は猫である』は漱石にとって精神的な自殺であり、また藤村操の自殺に対する同意と反論であり、それらを遂げて、作家としての第二の人生をスタートさせたという解釈もなくはないように思えてくる。

あくまでわたしの感想であり、素朴な印象の組み合わせでしかないので、ツッコミどころはたくさんあるだろうけど、そんな読み方によって『吾輩は猫である』は明治の若き知識人たちにとってもセラピー的な小説として昨日していたんじゃないかなあ、なんてことを考えた。

とどのつまり、『吾輩は猫である』は名前のない猫が名前を手に入れられないまま、好奇心に赴くまま行動した結果死んでしまう話なわけで、それを荒唐無稽なコメディに仕立て上げているのは、深刻な問題を深刻に悩み過ぎないために必要な発想転換になったんじゃないだろうか。同時期の文学でも自然主義は深刻過ぎて、あの価値観では生きていくのが大変過ぎる。いわゆるアンチ自然主義としての余裕派とは、漱石が大人として「もっと肩の力を抜けよ」とアドバイスしていたようなものだったのかもしれない。

さて、こんな風に言っていると『吾輩は猫である』がちゃんとした小説のように聞こえるかもしれないので、最後に、ナンセンス文学であることを確認しておかなくては。じゃないと下手に読み始めて、その意味不明さに退屈し、挫折してしまうに違いないから。

とりあえず、『吾輩は猫である』はギャグ漫画みたいなものだと思っておいた方がいい。脱線に脱線が重なるし、メタ的な表現も普通に出てくる。

個人的に好きなのは連載小説という構造を活かして、読者からのファンレターを作中に登場させるという演出をしているところ。

吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながらちょっと鼻が高く感ぜらるるのはありがたい。

元朝早々主人の許へ一枚の絵端書が来た。これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑りで塗って、その真中に一の動物が蹲踞(うずくま)

っているところをパステルで書いてある。〈省略〉画家だけに形体も色彩もちゃんと整って出来ている。誰が見たって猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫じゃない吾輩である事が判然とわかるように立派に描いてある。〈省略〉

やがて下女が第二の絵端書を持って来た。見ると活版で舶来の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握ったり書物を開いたり勉強をしている。その内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じゃ猫じゃを躍っている。その上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側に書を読むや躍るや猫の春一日という俳句さえ認(した)められてある。〈省略〉

下女がまた第三の端書を持ってくる。今度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、傍らに乍恐縮(きょうしゅく)ながら)かの猫へも宜しく御伝声奉願上候(ねがいあげたまつりそろ)とある。いかに迂遠(うえん)な主人でもこう明らさまに書いてあれば分るものと見えてようやく気が付いたようにフンと言いながら吾輩の顔を見た。その眼付が今までとは違って多少尊敬の意を含んでいるように思われた。今まで世間から存在を認められなかった主人が急に一個の新面目(しんめんぼく)を施(ほ)こしたのも、全く吾輩の御蔭だと思えばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。

夏目漱石『吾輩は猫である』より

言っても、小説は小説。まじめ腐って読むようなものでは決してない。ただ、そんなくだらなさで隠さなければ、重要なメッセージは後世に残すことができないという見方もできる。

だとすれば、『吾輩は猫である』のようなふざけた小説が未だに語り継がれ、その知名度の割に内容の退屈さと無駄な長さゆえに、ちゃんと読み切った人が少ないという現状はあまりにも興味深過ぎる。

今回、わたしは藤村操の観点から『吾輩は猫である』を読んできたけど、おそらく、もっとさまざまな角度からの考察が可能なはず。謎が謎を呼ぶ限り、夏目漱石は永遠だ。

いま、再びの漱石に、勝手に一人で没頭している。読書って本当に楽しい。